

## 作品梗概集 1

1. 此処に掲載した各梗概は、十七世紀フランス演劇研究会での発表をまとめたものである。
2. 各々の梗概の執筆は、研究会での発表者が担当した。
3. 掲載の順序は、担当者の意図を尊重し、担当者別にまとめ、その中では初演年代順とした。
4. 読者の便宜を考慮し、梗概集の末尾に作品の初演の順序で索引を付した。
5. 索引では、初演年代の不明のものは、出版年代を記し( )で年代を囲んだ。
6. 初演年代は、ダイエルコウフ＝オルスボウエルに拠ったが、言及がない場合は、根拠とした研究者の名前を年代の後に付した。

Garnier : *Hippolyte*

ジャンル 五幕韻文悲劇，合唱付

初演 不明

出版 1573年

主な出典 セネカ『パエドラ』

1573年、Saint Maixent のコレージュで生徒達により上演されたとされている他、1594年タルミィ劇団の上演演目にも記載されている。構成、人物、テーマ等、その殆どをセネカにおっているが、わずかながらエウリピデスの『ヒッポリュトス』の影響も見られる。時は一日以内、場所は王宮の前と中で展開される。しかし、合唱団が残されていて、真実らしさに抵触する部分が多い。セネカに見られた登場人物と合唱団との会話は廃止されている。合唱団が筋の進行から除外されている点、専ら愛だけをテーマとしている点が他のガルニエの悲劇に比して、この作品を特異な存在としている。フランスにおいて、劇の筋が愛によって進行する近代的な悲劇が、この時期に執筆されたのは注目に値する。モラルを説こうとする傾向が強いのも特徴。

〔第一幕〕 王宮の前。アテネ王テゼーの父、エジェの亡霊が近い未来に不幸が訪れると予言。テゼーがミノス王から二人の娘アリアーナとフェードルを略奪したこと、黄泉の国の王プルートを辱めたことが、神々の怒りを招いたのだという。その不幸とは、王妃フェードルが密通の末自殺し、テゼーが息子を殺す羽目に陥るといったものだ。亡霊が姿を消すと、イポリートが現れ、その朝見た不気味な夢の話をする。獷猛なライオンの退治に挑んだが、剣が役にたらず、反対に爪で腹をつきさされてしまったのだという。そこで恐怖の余りはりさけんばかりの大声をあげたところ、夢から覚めることが出来たのだ。一方、ふくろうや犬が奇妙な鳴き方をしたり、犠牲の羊に異常が認められたり

したこともあり、イポリートは測りしれない不幸が到来するのではないかと危機感を高める。狩人で構成される合唱団が狩猟を賛美する。

〔第二幕〕 王宮の前。フェードルは故国クレタの栄光を思いだし、何故そこから逃れ、不実な男の手に落ちてしまったか、と嘆く。移り気なテゼーは、黄泉の国にプルートの妃を奪いに行ってしまった。しかし、夫の裏切り以上に辛いのは、夫と先妻との息子イポリートに狂おしいばかりの恋をしたことで、日夜、理性と恋とがフェードルの心の中で戦い争っているのだった。王妃から恋の告白を受けた乳母は、神々の世界と人間界を峻別し、近親相姦は神々には許されても人間には許されないと考え、恋の炎をいまず消すよう助言。又、イポリートが愛の神には決して屈っしない若者である以上、フェードルの恋には未来がないのだとさす。王妃は名誉を重んじて、イポリートのことを忘れると約束する。が、その為に死を選ぶと断言。すると今度は乳母が意見を翻し、イポリートとの恋の成就に協力すると言って、王子に会いにでかける。合唱団が愛に対する人間の無力を歌う。

〔第三幕〕 王宮の前。フェードルは、イポリートを思い出しては涙にくれ、恋する女の苦悩をさらけ出す。乳母は乳母で、食事も睡眠もとらないフェードルの苦悩の日々を語り、嘆く。乳母は折りよくそこにやってきたイポリートに、森ばかりにこもらず若者らしい楽しみを味わったらどうかと話しかける。しかし、王子は静かな山や海が好きだと答え、女性に対しては露骨な嫌悪感を示す。愛がなくなれば自然界は再生されなくなり、絶滅するしかなくなると乳母が説いても、イポリートは聞く耳を持たない。そこにフェードルが登場。しかし、すぐに気を失って倒れてしまう。乳母の介抱で意識を取り戻した後、イポリートに話しかけようとする。しばらく躊躇したものの、王子に「母上」と呼ばれたことに刺激され、王子の侍女にこそ自分は相応しいのだと言って、王杖をさしだす。一方、テゼーの生還を毫も疑わないイポリートには、王妃の態度が理解できない。が、王妃の苦悩を和らげるために、テゼー不在の間だけ、夫の代わりをしようとして申し出てフェードルを慰める。フェードルは再び王子の言葉に刺激され、テゼーとクレタで出会った頃の話をしながらか、遂にイポリートに愛を告白してしまう。王子は激怒し、接吻してくる彼女を払う。剣で復讐しようとしたが、フェードルに触れたと言ってそれもそこに捨てたまま退出。乳母は、王妃の秘密が露顕したため、先手を打って、罪をイポリートになすりつけることにする。合唱団は、恋に狂った女を描写する。

〔第四幕〕 王宮の前。テゼーが、地獄から戻る。が、彼を真先に迎えたのは乳母の叫び声で、王妃が自殺しようとしていると教えられる。王は中に入り直接フェードルに会って理由を質すが、王妃は口を閉ざしたままだ。乳母を拷問に掛けると脅して、ようやく妃が凌辱されたことを知る。更に相手を探ねたところ、剣が差し出され、その持ち主が犯人と教えられる。再び王宮の前。剣がイポリートのものと即座にわかったテゼーは怒り狂い、ネプチューヌに息子を殺すよう祈願する。乳母は事の重大さに恐れおののき、毒を仰いで登場。体が毒で燃え上がるのを感じながら、自分の罪深さを思い知る。合唱団はテゼーの願いをネプチューヌが叶えないように祈る。そして、テゼーの軽はずみな行為は、神々が怒ったためのものと言う。

〔第五幕〕 王宮の前。使者がイポリートの死を伝えに来る。城を出て、馬車で海辺を走って行く

たところ、静かだった海が急に騒ぎ怪物が出現。陸に上がってイポリート達を追い掛けた。逃げる馬を止めようとしてイポリートは落馬。鞭で体が馬車にくくりつけられたまま引き摺られ、死んだ、と報告される。テゼーはネプチュースに感謝し息子の死を喜ぶ。しかし、そこにフェードルが登場。イポリートの死を嘆き悲しみ、テゼーにその息子の無実を証言する。その後、イポリートの短剣で自殺する。合唱団は不幸な出来事に悲しみを表明。残されたテゼーは、余りの罪深さに自己に自殺を許さず、悲嘆の涙にくれつつ余生を生きながらえる決意する。 (野池)

### La Pinelière : *Hippolyte*

ジャンル 五幕韻文悲劇，プロローグ付

初演 1634年2月以降出版年迄の間，オテル・ド・ブルゴーニュ座（ランカスター）

出版 1635年

主な出典 セネカ『バエドラ』

作者の記すように、セネカをほぼ踏襲している。相違点のうち主要なものは合唱団の廃止。そこから場面構成，台詞，人物面などにオリジナリティが生まれた。作者の意図の一つに視覚面での楽しみがあげられる。又、古典劇作法は守ろうと努力。三単一の規則はほぼ遵守されている。liaisons des scènesは6箇所で切れるが、残酷さを台詞レベルに後退させる等、bienséancesへの配慮はなされている。序文の中でロトルーを支持し、1634年当時のフランスにセネカ悲劇を定着しようとした努力は注目に値する。コルネイユ等6人が寸鉄詩を寄せた評判作。

〔プロローグ〕 愛の女神ヴェニユスが四輪の車を白鳥に引かせて空中に現れる。自然界をあまりくその支配下におく女神にとって、一人彼女にそむき恋もせずディアーヌ女神を慕うイポリートは許せない存在である。「今日」こそ、愛に屈するか、死ぬか、のいずれかを選択させると開戦を宣言。なお、ヴェニユスは以後舞台に姿を現さない。

〔第一幕〕 フェードルの部屋。アテネの王妃フェードルは、夫テゼー不在の間に、テゼーが先妻との間にもうけた息子イポリートに恋をし、苦悩に責め苛まれている。愛の女神を呪うが、思い出されるのは母親の恋。雄牛が相手の汚辱に満ちた恋でも、相愛だった。せめて自分も相手に打ち明けられれば……と考える。すると気持ちが急に和らぎ、女神に今度は恋の甘美さを味わせてくれたことを感謝。一方、同じ朝森ではイポリートが狩猟係にあれこれ手筈を指示。狩りの女神ディアーヌに祈りもささげ、狩りへの情熱をたかめている。再びフェードルの部屋、王妃は、姿を現した乳母に恋に悩む胸のうちをもはや隠さず吐露。が、恋人の名前はあかさない。乳母の驚愕。命をかけても王妃を正道に戻そうとする。又、王妃のやつれた姿を草やバラのしおれる様にたとえて慨嘆。恋のため息をもらす弱者達を批判する。王妃は王妃でバラの花に喩えてイポリートの美を形容するのに夢中。

〔第二幕〕 フェードルの部屋。幕間にイポリートが恋人だったと明らかにされている。乳母は不

倫の恋が夫や神々に知れたらどうすると王妃に詰め寄るが、王妃の方は、最初に裏切ったのは夫であること、神々も近親相姦の罪は何度も犯していること、等を理由に、自分の無実を主張する。イポリートが恋を知るようになるかもしれないと期待もするが、最後に名誉を考え乳母の説得を受け入れる。が、同時に自殺の決心も固めたため、今度は乳母が折れ、王妃の為にイポリートに会いに行く。乳母は森のことしか頭にないイポリートに対し、宮廷に出るよう、恋をするよう、誘いかける。しかし王子は拒絶。その上女性一般を激しく攻撃する。

〔第三幕〕 フェードルの部屋。乳母の報告を聞き、フェードルは心乱れる。王子を追って自分も森に急ごうと、狩りの服装を整え始める。日が暮れる迄に、愛を手に入れるか、自殺するかいずれかになろうと予告して、退出。部屋に残された侍女の一人は、仲間に王妃の恋の秘密を教えるが、知らぬ顔を決め込む方が得策と思う。一方フェードルは、城外に出た所でイポリートと出会い、失神。正気に戻ると口をきこうとするものの、何度もためらい、狼狽する。青ざめたり、顔を赤らめたりし、そばにいる乳母をも不安に陥らせる。イポリートに王妃と呼ばれたところで我に帰ったフェードルは、王妃ではなく侍女と呼んで欲しいと王子に言う。テゼーから預かった玉座にイポリートが座り、イポリートが国を治めるよう促す。テゼーの生存を信ずる王子に対し、王妃は黄泉の国からの夫の生還はあり得ないと断言、王子の膝に身を投げかける。愛を告白し、一度だけ接吻させて欲しいと言う。イポリートは激昂。殺して欲しいと言うフェードルに汚らわしいからと触れもせず、また、彼女に触れた剣もその場にうち捨てて退出。(以後イポリートが舞台に登場することはない。)乳母は王子に罪を着せるのが得策ととっさに判断。近衛隊長を呼び、王子逮捕を命令する。

〔第四幕〕 王宮内。テゼーが黄泉の国から戻る。悪事の思い出を語るの楽しいものと取り巻きの者達に言いながら、いかにして地中の国を訪れたか、そこがどんなだったか事細かに語って聞かす。乳母が現れ、フェードルの部屋にすぐ行くようテゼーに請う。テゼーが退出すると、王の取り巻きは乳母に事件に巻き込まないで欲しいと頼む。余計な事を言って王の覚えの悪くなるのを恐れたためだった。テゼーは王妃の部屋を訪れ、何故自分が生還したのに王妃の方が死のうとしているのか何度も尋ねる。乳母を拷問に掛けるとフェードルを脅して、漸くイポリートの横恋慕を知る。王妃は証拠の品として王子の剣を出し、イポリートを暗示したのだった。テゼーは怒り、処罰をネプチューヌに祈願。

〔第五幕〕 王宮。イポリートの死が報じられる。王子がアテネの外に出た時、海から怪物が出現。退治する間もなく馬車が転覆し、引き摺られて行くうちに落命。藪から片目を拾う等し、バラバラの死体が集められたと報告される。テゼーは亡骸の安置されている王妃の部屋に急ぐ。王妃は恋人の死骸にとりすがり泣いている。イポリートが無実だったことをテゼーに告白し、不幸のすべてはテゼーの帰還にあったとテゼーを非難。王妃は王子と苦悩を分かち合うため短剣で自殺。テゼーは自分の罪を認める。

(野池)

Gilbert : *Hypolite*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1645年 (シェレル), オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1647年

主な出典 セネカ『パエドラ』

セネカの他に、フェードルの台詞『お前だよ、あの人の名前を言ったのは。』を含めた何箇所かにエウリピデスの『ヒポリュトス』の影響が、青年時代のテゼーの描写にプルタルコス『対比列伝』の影響がみられる。いのしし退治のくだりはオウィディウス(『転身物語』)やガルニエ(『イポリート』)に類似してい、ガルニエとの影響関係はその他テゼーとフェードルの愛の設定にもみうけられる。場所はテゼーの王宮で一個所、時も筋も単一。liaisons des scènes も破られていない。シュリー公爵夫人等のサロンから閉め出されないように、イポリートは恋のできる若者に書き換えられている他、フェードルもテゼーとは婚約中という設定にして近親相姦が回避されている。ジルベールの処女悲劇。結果は大成功ではなかった。

〔第一幕〕 フェードルの父の喪があけて、彼女とアテネ王テゼーとの結婚を阻むものはもはや何もなくなくなった。それにもかかわらず未来の夫は戦いに出かけて留守。政治的理由と言われるものの、一方では若い女を追いかけけているという噂も流れている。フェードルは移り気なテゼーに対し激しい憎しみにとられる。しかし、それとは別にフェードルには人にはいえない苦悩があった。それをその日、腹心の侍女<sup>コンフィダント</sup>にあかしてしまう。フェードルは婚約者以外の男を愛し始めたというのだ。又、相手はテゼーが先妻との間にもうけた子供イポリートだ、と暗示する。浮気を先にしたのはテゼーだったこともあり、フェードルには罪の意識はない。フェードルは新しい恋人が女嫌いと言われていることなどは無視し、ともかく彼が狩りから戻るのを待ち、思いを打ち明けようと決心する。

〔第二幕〕 イポリートの祖父ピターは森の大いのししを退治してきた孫を迎え、勇敢な働きを称賛する。又、テゼー留守の間預かった王杖とフェードルはいずれも責任もって守るように助言。特に恋多きフェードルには注意するように言う。王子の頭はテゼー不在が引き金となったフェードルの愛の苦悩しがなく、その二人に破局があらうとは露ほども疑っていない。祖父は神々に祈りを捧げるため退出。いれかわりに友人のアリステが登場、浮かぬ顔付のイポリートにその理由を尋ねる。イポリートはその朝みた悪夢を語る。父母の結婚式の夢で、フェードルは式の途中でテゼーを拒みイポリートに愛を示した、そのために二人ともテゼーに殺された、というものだ。アリステは友に誰かと恋をするように薦めるが、イポリートにとってはフェードルが完璧すぎて、他の人には魅力を感じられない。フェードルの腹心の侍女<sup>コンフィダント</sup>アクリーズに言い寄られているが、逃げるだけだと言う。そこにアクリーズが姿を現す。彼女は怪物退治を称賛するフェードルの言葉をイポリートに伝えた後、少し女性に近寄ってみてはどうかと切り出す。そして、フェードルが、イポリートにも幸せを分け与えたいと考え、ある王女を捧げるつもりになっていると嘘をつく。王子はそれには全く冷淡。アクリーズは女性



出版 1675年, リール  
主な出典 ジルベール『イポリート』

エウリピデス（『ヒッポリュトス』）やセネカ（『パエドラ』）の影響はジルベールの中に既にあり、ビダールはそれを間接的に受け継いだ。その他、トマ・コルネイユの『アリアーヌ』（p.89 参照）、ラシーヌの『バジャゼ』、『アンドロマック』、キノーの『ベレロフォン』等の影響が見られる。ビダールの最大のオリジナリティは、シアヌなる人物を創り出し、イポリートと相愛に仕立てたことにある。場所は人々の往来する王宮内の一ヶ所に限られ、その他、時も筋も単一、直前の1672年に初演され大ヒットしたトマ・コルネイユ作『アリアーヌ』の後日譚という趣がある。

〔第一幕〕 フェードルはアテネ王テゼーとの結婚式の当日、腹心の侍女のバシーヌにテゼーをも愛していない、それどころか、テゼーと先妻との息子イポリートに身も心も奪われていると打ち明ける。とうてい結婚を受け入れる心境にならず、式の延期をテゼーに申し出る。姉アリアーヌからテゼーを取り上げたい見殺しにしたことへの自責の念が、その表向きの理由だが、テゼーの方はひどく失望し、婚約者の心変わりや疑念を疑う。しかし式は延期される。フェードルは、誠実なテゼーに対し申し訳なくも思い、又、イポリートが若いシアヌを愛している可能性も認めない訳ではないが、式が延期されたからには、どうしても恋人に会って心を打ち明けたいと欲する。

〔第二幕〕 国王の結婚延期はイポリートとシアヌの若い二人にも暗い影を投げかけた。テゼーは喜びを息子達にも分かち与えようとし、同時に二組の式を挙げるつもりでいたからだ。フェードルが別の男を好きになったのではないかと疑い、若い二人は不安を募らせる。その時シアヌがフェードルの姿を認め足早に退場。残されたイポリートは恋人が去り際に忠告した通り、フェードルの苦悩の真の原因を探ろうとする。が、二人の恋人の心配をよそにフェードルはテゼー以外の男に恋をしたとイポリートに白状。相手の名は伏せる。しかし彼女は狼狽するイポリートを見てあなたに魅了されているのだと衝動的に告白する。打ち明けられた王子の方は激怒するばかり。フェードルはすぐに後悔し、死ぬより他ないと言い出す。が、彼女は恋に運命的なものを認めているものの、ともかく王子の忠告を聞き入れテゼーを愛する努力をしようと約束し退場する。テゼーの怒りを恐れ呆然とするイポリートの目前に、テゼー本人が現れる。父は息子のただならぬ様を見て、フェードルの心変わりへの疑惑を更に深める。

〔第三幕〕 ライバルがシアヌだとわかったフェードルは、二人の仲をさくためにフェードルにあてたイポリートの手紙を捏造。そこでイポリートに何度もシアヌには魅力を感じていないと言わせた。次に偽の手紙をシアヌに見せて絶望のどん底に落とし入れ、思う通りに計画を進める。シアヌは、筆跡が類似していたことで恋人の心変わりを簡単に信じて悲嘆にくれるが、自分の想いはそれでいささかも減じることはないを知る。そこにイポリートが現れる。シアヌは恋人を見るや裏切り者と叫んで、手紙を一度手渡し見せようとしたが、意見を変えて相手からその手紙を奪いかえし、逃げ出す。イポリートにはシアヌの怒りが理解できず、そばにやってきたフェードルに事情を尋ね

てみる。が、理由が何時までたっても明らかにされない。失望のあまり自殺を考え始めたところ、その時になってフェードルが、去るものは追う必要はない、フェードル自身の愛をうけいればそれでよい、と言い出した為、イポリートも自分が謀られたことに気付く。イポリートは真相を確かめにテゼーのもとに行こうとするが、それを見たフェードルが突然逆上し、若い二人の仲をさこうとしたのは自分だと認め、それもイポリートを余りにも愛し過ぎたためと告白する。イポリートは怒り狂い、愛を打ち明けるフェードルをその場に打ち捨て、無言で退出。残されたフェードルは、王子の仕打ちに狂乱の度合いを更に強めて、こうなった以上は、テゼーを徹底的にだますよりほかないと思う。

〔第四幕〕 バルジーヌによる再度の働きかけも効を奏さず、イポリートの心をひきつけることに失敗したフェードルは、王子に殺意までも感じるようになる。折よく通りかかったテゼーにフェードルは、結婚を延期している間にイポリートに横恋慕され、その上国王暗殺の共犯になるように誘われたと、嘘をつく、又、イポリートのシアーヌへの愛は見せ掛けだと断言する。テゼーはフェードルの言葉を信じ、イポリートに逮捕命令を出す。連行されて来たイポリートに、フェードルとシアーヌの二人が手紙を巡って非難の言葉を浴びせかける。王子は数回に渡り手紙を書いたのが自分ではないと言い出すが、取りあってももらえない。王子に有罪の宣告をして全員退出するが、王子は恋人だけをなんとかして引き止めることに成功。一対一で疑いを晴らそうとする。シアーヌも最終的にはイポリートを信じ二人は和解する。そこにイポリートの腹心<sup>コンフィダン</sup>がイポリートの身の危険を知らせに来たため、シアーヌの意見に従いイポリートは逃亡することにする。

〔第五幕〕 テゼーは結婚の日取りが再び決まり大満足。しかし、シアーヌからイポリートが無実なこと、すべてを計ったのはフェードルであることが打ち明けられ、不安にかられる。そこにイポリートの死が報じられる。王宮を出て森に向かう途中、海中から怪物が出現。馬車が暴走してイポリートは瀕死の重傷を負った。そばに来た羊飼いの介抱のおかげで、一度息を吹き返したが、遂にはシアーヌの名を呼びつつ死んだという。フェードルは恋人の死を知って、罪をテゼー等に告白、許しを請い毒を仰ぐ。そして退場。シアーヌも自殺をほのめかし退場。嘆くテゼーにフェードル、シアーヌの死が報じられる。(野池)

Pradon : *Phèdre et Hippolyte*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1677年1月3日、ゲネゴー座

出版 1677年

主な出典 エウリピデス『ヒッポリュトス』

競合作品 ラシーヌ『フェードル』,1677年1月1日オテル・ド・ブルゴーニュ座にて初演

最古の先行作品という意味においてエウリピデスの影響が考えられるが、その他セネカの『パエド



ラ], ガルニエ及びビダールの『イポリート』, ラシーヌの『フェードル』が参照されている。又, ラシーヌの『バジャゼ』, トマ・コルネイユの『アリアーヌ』, キノーの『ベレロフォン』等との類似も指摘できる。中でもラシーヌの『フェードル』は, プラドンの作品の2日前にオテル・ド・ブルゴーニュ座で初演されたばかりのものであるが, それはプラドンの『フェードルとイポリート』がラシーヌの失脚を狙った反ラシーヌ一派の要請で執筆されたことによるもので, ラシーヌのオリジナリティの多くをプラドンが模倣したのだった。この陰謀事件は反ラシーヌ派の『フェードル』(ラシーヌ)上演妨害に始まり, 両者のエピグラムの応酬にまで発展するが, プラドンの筆による悲劇は, 20数回上演されただけで終る。場所はトレゼーヌの王宮, 時は1日以内, 筋はフェードルの兄弟の話が余計ではあるがほぼ単一。

〔第一幕〕 アテネの王子イポリートは, 悪事の前兆と思われる事件に遭遇。神々の怒りを怖れ, 即刻, 地獄に下ったとも噂される父王を深しにでかける決意を固める。が, 出発に際し王子はアリシーに心を打ち明け, お互いの愛を確かめあうことに成功。一方テゼーの婚約者フェードルは, テゼー不在の間にイポリートを愛すようになり, 苦悩の日々を送っている。が, 『その日』迷いながらも思わずアリシーに, 自身の不倫の恋を打ち明けてしまう。フェードルはイポリートと結婚し, それと同時に自分の兄弟とアリシーを結びあわせ, 国の統一をはかろうと計画。その為にテゼーの死の報をばらまこうとする。

〔第二幕〕 フェードルはイポリートに出発を取りやめるよう申し出る。父ばかりかその息子までを目前から奪われるのは, 全ギリシアにとっても, 彼女にとっても耐え難い事なのだ。もし王子が恋を知っているならば恋に引き止められることもあろうに, とフェードルは王子に話し続けるが, イポリートは自分をひきつけるのは名誉だけだとすげない返事を返す。しかし, 「その(=彼女の)美しさは, 私にたぎりたつ欲望を抱かせ……」と言って, フェードルには名誉の美しさと解され, 恋人アリシーにはアリシーの美しさと取れる言葉を吐く。最終的に, イポリートはアリシーへの思いをたちきれずに, 出発を延期する。フェードルは, イポリートが女性嫌いではないことを発見し希望を持ち始めるものの, そこにテゼーの帰還が伝えられ, 再び行手は塞がれる。一方, 戻ってきたテゼーは, 地獄に下ったと人には噂させ, その実アテネに潜行, 暴君パラスを退治すべく戦っていたと, 真相をあかす。そして延期していた婚姻の儀式をすぐあげようとする。

〔第三幕〕 気を失っていたフェードルはアリシーの介抱を受けている時, あるきっかけがもとで, 突然, アリシーとイポリートの仲がおかしいと勘付く。彼女はすぐに式を挙行しようとするテゼーに対し, 自分の兄弟がアリアーヌの件で, トレゼーヌを攻めてくる, と言って結婚の延期を申しでる。テゼーは, その昔, 愛する女を自分の最愛の男に奪われるという神託を受けたことがあるので, それを拒否。それどころか, 恋愛中とおぼしき息子とアリシーを結婚させ, 親子二組の式を同時に行いたいと言い出す。フェードルは苦し紛れにその伝達役を買って出イポリートに会いに行くが, 真相は隠して置くことにし, ただある若い女性と結婚してはどうかと言って嘘をつく。更に罠をかけて, イポリートがアリシーを愛していることを白状させる。真相をつかんだフェードルは嫉妬にとらえられ, 恋

仇アリシーを殺すとまで言いだす。兄弟の援軍をあてにし、戦いを始めるつもりになる。

〔第四幕〕 フェードルの謀りごとを知らないテゼーは、イボリートがアリシーとの結婚を拒否してきたのをそのまま信じる。そして、その理由がイボリートのフェードルへの愛にあるのではないのかと疑い、いよいよ神託の実現される時がきたのか、と危ぶみだす。疑惑は深まり、遂にイボリートを追放刑に処すことにする。フェードルはそれを聞くと、真実は隠したまま、ただイボリートの刑の取り消しだけをテゼーに求める。しかし、テゼーは息子だからといって手心を加えはしないため、フェードルは途方にくれる。恋人の死を願うわけでは毛頭ないが、愛と同時に憎しみも感じて、自己を次第に見失っていく。が、やがて、反省の念が芽生え、真実を語らなければならないと悟った時、イボリートが姿を現す。イボリートはそのフェードルの心情など知るよしもなく、フェードルへの怒りをあらわにし居丈高な態度を示したため、再びフェードルが逆上、アリシーを殺してしまうと叫ぶ。イボリートはフェードルの気持ちを宥め、恋人を危機から救い出すため、又、同時に神々をなじるフェードルに哀れみを感じたこともあり、フェードルの足下にひざまずく。そして、父テゼーがイボリートに乗り移った、テゼーの愛をイボリートの口から受け取って欲しいと言う。しかし、イボリートの誤解を招きやすい姿をテゼーが目撃するにおよび、事態は大混乱に陥る。追放だけではすませられないと、テゼーは判断し、ネプチューヌに息子の殺害を祈願する。

〔第五幕〕 イボリートの優しさに触れることのできたフェードルは、幽閉していたアリシーを解放する。アリシーはテゼーに会いに行くが、その時初めて、両家の親の意志によりイボリートと結婚することになっていたことを知る。テゼーのほうは、息子がアリシーに愛を告白していたことを知り、呆然とする。しかし、まもなく二人のもとにイボリートの死の報が届く。追放刑を受け入れ、イボリートが城外を出て海辺に達すると、海から怪物が現われたという。制御のきかなくなった馬達に王子は引き摺りまわされ、重傷を負って気を失った。そこに後を追ってきたフェードルがたどりつき、王子の耳もとでアリシーの名を呼んだところ、王子は目をあけたが愛する人の姿を認めることができず、そのまま息をひきとったという。それをみていたフェードルは、地獄まででも王子を追って行こうとし、剣で自殺したという。イボリートのあとを追おうとするアリシーを、テゼーはもう死は充分と考え引きとめる。  
(野池)

### Rotrou : *La Bague de l'Oubli*

ジャンル 五幕韻文喜劇

初演 1629年初頭(ランカスター)、オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1635年

主な出典 ローベ・デ・ヴェーガ 『忘却の指輪』 *Sortija del olvido* (1619年刊)

スペインの小説や詩からではなく、戯曲を出典とする、フランスにおける最初の劇作品である。

「これはスペインの作家ヴェーガの純然たる翻訳である。」とロトルーは作品冒頭の『読者に』の中で謙虚に告白しているが、実際には原作との相違点は数多い（全体の構成、王の恋愛の性質、大団円の処理など）。何よりも作者が努力したのは、原作の冗慢な技業を刈り取り、魔法の指輪によって引き起こされる喜劇的シチュエーションの連鎖を前面に押し出すことにあったようだ。当時不振だった喜劇というジャンルの復活を告げる作品とされる。時はほぼ24時間、場所は主に王宮内である。liaisons des scènesは無視されており、いくつかの装飾的エピソードが差しはさまれてはいるが、忘却の指輪が作品全体を一貫して作動させているという点において、かなりまとまった印象を与える喜劇である。

〔第一幕〕 舞台はシチリア島、パレルモ。王妹レオノールと貴族レアンドルは相愛の仲だが、身分の差が結婚を妨げている。そこで彼女は彼に王位篡奪の陰謀をそそのかす。ただし兄王の命は奪わずに、と。レアンドルは魔術師アルカンドルを訪ね、魔法の指輪を手に入れる。それは身につけた者の記憶、理性、判断力を奪うであろう。一方、王アルフォンスはアレクサンドル公の娘リリアーナに恋をしているが結婚をする気はない。気ままに恋を楽しむために、厳格な父親の公爵と彼女の婚約者タンクレード伯に無実の罪を着せることに決める。

〔第二幕〕 一夜明ける。リリアーナは、軽はずみな娘をすぐにも結婚させた方がよいと考えた父親によって、王宮から離れた城に移されている。タンクレード伯が到着し、公爵ら一同出迎えるが、王の衛兵に襲われ逮捕されてしまう。王宮では道化のファブリスが“罪人”の監禁を報告。王は吉報を喜び、彼に2000デカの報賞を約束する。この間、伺候していたレアンドルは王の洗面の機会を狙って指輪をすり換えることに成功。王はたちまち迷妄状態に陥り、臣下の判別が不能になり、公爵らの逮捕理由も憶えていない。報賞金の支払命令書にサインを求めるファブリスをも無視し、書類を破り捨てる。

〔第三幕〕 恋人リリアーナさえ判別できない王は、公爵らの逮捕理由を不明として彼らを釈放することにし、そのしるしに彼女に指輪を与える。と、王の理性は蘇り、ファブリスに改めて褒美を約束。ところが、父親と婚約者を解放した後、リリアーナが指輪をはめてしまい、一切の記憶を喪失する。狼狽しながらも王は再度邪魔者たちを幽閉するよう命じる。が、恋人から指輪を返却されるとまたもや錯乱。そこに新たな支払命令書を持ってファブリスが駆けつけるが、再び破棄されてしまう。

〔第四幕〕 レオノールは政務執行が不能になった王に副王としてレアンドルを推薦し、さらに陰謀の完璧な成就を期して公爵の死刑、伯爵の追放を承諾させる。ファブリスは王の病を利用してひともうけしようと企み、王が身に着けていた指輪を含む貴金属を詐取する。王は理性を取り戻すが“病中”の記憶は全くない。自らが下した死刑宣告に驚き、リリアーナと追放される伯爵の結婚の予定を聞いて激怒し、抜き身の剣を手にして道化を追い回す。

〔第五幕〕 完全に正気を回復した王は危機一髪で公爵の死刑を中止する。公爵に許しを乞い、リリアーナに正式な結婚を申し込む。ファブリスは絶望したレアンドルの態度から指輪にいわくがあることを知り、王と共に指輪の秘密をつきとめる。ダイヤモンドの下に呪文を書いた紙片があったのである。効力の失せた指輪をはめ、王は三たび魔法にかかったふりをし、妹とその恋人を喜ばせる。病

のため王権をレオノールとレアンドルに譲る，が最初の職務としてある訴訟を裁いてほしい，と。訴訟の内容はまさにふたりの王位簒奪の陰謀そのものである。答に窮したレアンドルは王のふしだらな恋愛事件を楯にして応酬。結局両者は互いに反省し合い，レアンドルとレオノールは追放刑に止まった。王はファブリスを慰労し，三度目の正直として報賞金を確約する。（鈴木）

Rotrou : *La Belle Alphrède*

ジャンル 五幕韻文喜劇

初演 1636年初頭（ランカスター），オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1639年

主な出典 ローベ・デ・ヴェーガ『美しきアルフレダ』*Hermosa Alfreda*（刊行年不明）

これは波瀾万丈の冒険ドラマである。喜劇と銘打たれてはいるがコミックな要素は *La Bague de l'Oubli* よりはるかに少なく，唯一滑稽な登場人物はマタモール（大ぼら吹き of 兵士）の伝統的特徴をもつフェランドのみ。絡み合う複数の筋，危険を伴う様々な冒険譚が優位に立ち，内容は悲喜劇に近い。時は少なくとも数週間に渡り，場所はアルジェリアの港オランからロンドンに飛ぶ。両地においてもさらに細分化された場面が必要とされる。つまり古典主義の規則にことごとく反する作品であり，変装・難破・戦闘・幽閉・偶然の邂逅・劇中劇の場面・偽りの死・誘拐・人物取り違え・舞踊・肉体的快楽の賛美など，必然性の有無は別として観客を刺激する要素に事欠かない。バロック演劇の典型と言える作品である。

〔第一幕〕 嵐で船が難破し，オラン近くの海岸に打ち上げられたスペインの男装の美女アルフレード。彼女は自分を捨ててロンドンの新たな恋人のもとに走った浮気男ロドルフを追い，バルセロナから船出したのだった。と，そこに当のロドルフが従者フェランドと共にアラブ人の海賊に追われて逃げて来る。ロドルフは海賊のひとりを切り殺し，アルフレードも剣をとって加勢，海賊を退散させる。アルフレードは彼女と判別できずに感謝するロドルフにも打ってかかる。が，やがて正体を明かし，妊娠の事実も告げて彼の不実を責める。彼は罪を認めるがイザベルへの新たな恋を諦める気持ちはなく，自分の命をアルフレードに委ねる。しかしアルフレードは彼を殺すことができず，自らも出産までは生き延びる決意をする。そこへ再び海賊に襲撃され，多勢に無勢で彼らは捕えられてしまう。

〔第二幕〕 海賊の首領アマタスの根城。首領はスペイン人で，14年前生き別れになった娘を捜していた。捕虜のひとりを見てもしやと思い，まず大言壮語癖のあるフェランドを誘導尋問し，アルフレードが自分の娘である確信を得る。が，名乗り出る前に娘の勇気を試すための余興と称し，アルフレードに死刑を宣告して彼女を恐怖の淵に落とす。ともあれ父娘は対面し，それぞれが今までの波瀾に富んだ生の軌跡を語る。アルフレードはロンドンの女イザベルに会うため，イギリス行を願い出る。彼女には既にイザベルとロドルフの仲を巧みに裂くための筋書きができ上がっている。フェラン

ドと彼女の兄弟アカストが策略を成就する手助けをするだろう。

〔第三幕〕 牢獄で15日間の幽閉状態を嘆くロドルフ。フェランドがアルフレードの死の報告をもたらす。海賊の首領の求愛を拒み、刺殺された、と。首領は死にゆく彼女の願いを入れてロドルフの自由を約束したが、首領の息子アカストはアルフレードを捨ててまでロドルフが恋したイザベルの美貌に思いを馳せ、彼女を手に入れるためにイギリスに発った、ということも。ロドルフは自分への恋ゆえに殺されたアルフレードを悼み、激しい後悔の念に苛まれる。そこに現われた首領を罵倒し、父親の罪を息子の命で贖うため、アカストを追って自らもイギリスに渡る決意を述べる。場面はロンドン郊外の森に転換。イザベルを恋するエラストは、彼女が外国人（ロドルフ）と婚約したのを知って怒りに燃え、イザベル一家を襲って父親ユーリラスを殺害し、娘を凌辱しようとした。偶然通りかかったアルフレードはエラストを切り殺してユーリラスの命を救い、イザベルとオラントの姉妹をも救出する。イザベルと知ったアルフレードは、彼女にロドルフが死んだ、と偽りの報告をする。

〔第四幕〕 イザベルの別荘。アカストは彼女を一目見て恋に落ちたことをアルフレードに告白する。一方オラントもまた恋をした。相手はクレオメードと名の男装のアルフレードである。アルフレードはオラントの恋心を利用してアカストとイザベルの橋渡しを頼む。イザベルはアカストの素朴な恋の告白と父親の勧めで結婚を承諾する。計画通りに事が進むので満足するアルフレード。

〔第五幕〕 ロドルフとフェランドが投宿中のロンドンのホテル。ロドルフはアカストへの決闘状を届けるよう、フェランドに命令する。イザベルへの恋心は既に消失している。いや、どんな女もこれから彼を魅惑することはないだろう。彼の心は死んだアルフレードに占められている。彼女の復讐のみが彼の祈願だ。場面はイザベルの邸へ転換。大広間で彼女とアカストの婚姻を祝う舞踊が繰り広げられる。そのさなかダンサーに扮したフェランドはアカストに決闘状を手渡す。邸の外でロドルフとアカストはようやく相見える。復讐の念にはやる前者に対し、後者は冷静であり、驚くイザベルの前で策略を弄して彼女を得たことを卒直に告白。それでもなおイザベルはアカストを選ぶ。そこに女の姿に戻ったアルフレードが現われる。茫然とし、かつ狂喜するロドルフ。彼は自分の変わりやすい心を改め、忠実な夫になることを誓う。かくしてアルフレードの奇策は成就した。（鈴木）

Rotrou : *Laure persécutée*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇

初演 1637年末（ランカスター）、オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1639年

主な出典 ローベ・デ・ヴェーガ『迫害されるローラ』*Laura perseguida*（1614年刊）

やはりローベの戯曲を出典とするこの作品は、劇作家としてのロトルーの、最も充実した時期に書かれたものと言えよう。17世紀の悲喜劇の中でも特に優れた作品のひとつに数えられている。I幕か

らIV幕までの構成、筋立てはおおよそ原典に従っているが、全体を貫く劇的精神は時代の好みに合わせたものであり、V幕はロトルーの完全な創作である。時は一晩をはさんで約24時間、場所は王の宮殿とロールの家の二か所、*liaisons des scènes* の規則はほぼ守られている。規則を意識し始めた、40年代以降に現われる王宮悲喜劇の先駆けとも言えるだろう。最も高く評価されたのは、愛するのにふさわしからぬ相手（ロール）を愛さざるを得ない、という王子オランテの人間の葛藤を、生彩をもって表現したIV幕2場である。実際ランカスターは、「この場面はシェイクスピアにも匹敵する」と、最大級の賛辞を送っていることをつけ加えておこう。

〔第一幕〕 ハンガリー王の宮廷。王子オランテは父王の命令によって監禁されることになった。理由は身分も財産も釣り合わない外国生まれの女ロールとの結婚を王子が企てたため。王はポーランド王女を息子の妃にするつもりであり、王女はハンガリーに向かっている。ロールの命も危機にさらされるが小姓に変装して急場を逃れ、王子に会う。ロールは自分を捨てて王女と結婚するよう勧めるが、王子は肯んじない。既に王女の出発を阻止するための使者を派遣してしまった。そこに王が現われ、ロールの姿と心をめぐって王子と論争する。王は彼女に会ったことはなく、噂と憶測から淫奔でありあまり美しくもない女として彼女を誹謗し、対して王子はその美徳、聡明、高貴を主張する。結局、彼女の品行を試すことでその場は折り合い、王子は監禁を解かれる。

〔第二幕〕 王は王子の腹心オクターヴを買収し、策略を用いて王子の情熱を消滅させることを約束させる。その報酬としてオクターヴが望んだのはロールその人であった。しばらくしてエリアントと名乗る美女（実はロール）が王に面会を求める。彼女は自分の純潔を奪った男を罰してほしいと願い出たのだが、彼女の美貌に眩惑された王は彼女を口説き、密会の約束をとりつける。が、有頂点になったのも束の間、王子が現われて、今去った美女の正体を明かす。これで少なくともロールの美貌と才気については証明された。王は激怒し、受けた屈辱の復讐を誓う。

〔第三幕〕 ロールの家の前。オクターヴは策略を実行に移す。ロールの腹心の女で彼を恋するリディを女主人に変装させ、ロールへの迫害の手をそらすために自分との恋の語らいを王に見せてやるのだ、と偽る。リディが家に入った後、ロールが帰宅。口実をつくってオクターヴが彼女と共に家に入るのを、かねての打ち合わせ通りに王子を同道した王は息子に目撃させた。やがて外に面した部屋から、オクターヴに恋を打ち明け、王子のわずらわしい愛情をこぼすロール（リディ）の声が聞こえてくる。王子は絶望と怒りに我を忘れ、王がこの時とばかりもち出したポーランド王女との結婚を直ちに承諾する。出て来たオクターヴから偽りの真相を知った王子はロールと会い、今までに送った恋文を返すよう要求する。理由がわからぬまま彼女は涙ながらに従う。

〔第四幕〕 深夜。王子はロールを思い切れず彼女の家の前に佇んでいる。オクターヴは侮辱を受けて傷ついた筈の王子の名誉心を煽るが、オランテの愛と絶望は深い。激しい葛藤と躊躇の末、王子はオクターヴを去らせ、彼の声を模倣してロールを呼び出した。松明の明りで王子を見分けた彼女はオクターヴへの不信を訴える。リディは恋人たちの苦悩を見るに耐えず、ついにオクターヴの奸計を全て告白する。誤解はとけ、王子はオクターヴを許す。が、明朝ポーランド王女が到着するという報

告が入る。事ここに至っては、ロールとの結婚を急がねばならない。

〔第五幕〕 一夜明ける。王子とロールは婚姻の絆を結んだ。花嫁の養父クリダマスが祝福する。そこへ王子が以前派遣した使者がポーランドへの途上で客死したとの知らせ。いずれにしろふたりの結婚の事実を王に認めさせる方策を実行し、それに賭けるしかない。場面変わって王宮。王は息子とポーランド王女を引き合わせる。王の退出後、またもや正体不明の美女（ロール）が現われ、恋人の名を伏せて自分自身の恋物語を話し、窮状を訴える。裁決を任せられた王女は、父親の権威より恋の掟の方に軍配を上げる。そこで王子は全てを告白し、王女に許しと助力を乞う。王女は快諾。そこにクリダマスが登場し、養女ロールの真の素姓を明かす。彼女はポーランド王女の妹であった。ポーランド王の見た悪夢の故、母の配慮で素姓を隠してハンガリーで育てられたのだった。現われた王は全てを知って満足し、結婚に同意する。さらに王は姉の王女に求婚し受け入れられる。オクターヴとリディも結ばれるであろう。 (鈴木)

Thomas Corneille : *Camma*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1661年1月28日、オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1661年

主な出典 プルタルコス『対比列伝』(第2巻)

このテーマは、兄ピエールがフーケから受けた劇化三題のうちの一つで、弟トマに渡したものである。初演時は、大成功を収め、1678年迄オテル・ド・ブルゴーニュ座のレパトリーに挙げられていたが次第に人気が無くなり、1679年にはモリエール劇団で二回、1700年にコメディイ・フランセーズで二回上演されたのみである。

ラシーヌのアンドロマックの劇構造、筋のモデルになったと考えられている。

〔第一幕〕 シノリクスは6ヶ月前からガラチアの王となったにもかかわらず心は満されない。先王は彼を娘エジョーヌと婚約させ、王位継承者にしたが、彼は、実は、先王の新妻、女王カンマに恋し、そのために王を毒殺し、それによって得た地位である。この事実は誰も知らない筈である。王女エジョーヌを腹心ソストラートと結婚させ、自分はカンマと結婚したい。カンマは王女に同情し、彼の求愛を拒絶。ソストラートも王女の心を得られず、かえって王女の追放を進言している。一方カンマは復讐を考えている。彼女によれば、ソストラートはシノリクスの恋を伝える機会を利用して、カンマに対する自分の愛を語り、王殺しを暗示している。カンマは彼に心が傾いている。エジョーヌも結婚が履行されず、侮辱を受け、復讐をもくろんでいる。彼女はソストラートに愛され、彼女の目的の為に策略を巡らしていると信じている。彼女も又彼を愛し始めている。復讐が遂げられたら彼と結婚するつもりでいる。

〔第二幕〕 シノリクスは、カンマと結婚する為に合法的にエジオーヌを身辺から除きたい。彼女にソストラートを受入れるよう説得するが拒絶され、彼女を逮捕すると脅す。カンマには王女逮捕をほめかして脅し、懇願し、求愛し、彼女の態度を決めるように告げる。ソストラートに心が傾いているカンマは、彼と共に先王の復讐をしたいが、ソストラートは、シノリクスへの忠誠を言い、言葉巧みにカンマを説き伏せ、シノリクスの愛に応えるように仕向ける。

〔第三幕〕 シノリクスはカンマの変化に至福を感じるが、王女と先王を思うと罪の深さにおののく。彼が独りで居るのを見定めたカンマは、背後から短刀で刺そうとするが、その時ソストラートが現れ、短刀をはたき落とす。シノリクスは二人の内どちらが下手人か判らない。含みを持った二人の言葉から、ソストラートを下手人と思ひ込み、死を命じる。ソストラートはカンマを庇いそれをうける。シノリクスは王女にけしかけられて彼が自分を狙ったと解釈する。王女もそれを否定しない。彼の命を救いたいシノリクスはそれを条件に、王女に彼と結婚するよう勧めるが、王女は王冠につながらない結婚として拒む。

〔第四幕〕 ソストラートの無実を打ち明けようとして反対されたカンマは、彼の助命を条件に、シノリクスに結婚を明日に約束する。しかしソストラートはただ死を望む。カンマはこの忌まわしい結婚の受諾は彼を救うためだが、それはまたシノリクスの妻となり、ソストラートを罰し、彼の王への忠誠にも報いるため、と恨みごとを言う。ソストラートは彼女が王冠に目が眩んだのだと非難する。彼はエジオーヌにこの不当な結婚を女王に取り止めるように説得を頼む。エジオーヌはカンマが結婚により王冠を手に入れたことに激怒し、ソストラートと組んで彼女に同情する不満分子を決起させることを決める。

〔第五幕〕 明朝。結婚式の実況報告：エジオーヌは神殿で民衆を煽り、王と女王を侮辱し逮捕される。助命されたにもかかわらず高慢な態度を取るソストラートに不快を感じ、詰めよるシノリクスに向かい彼は、愛しているのはエジオーヌではなくカンマであった、と告白する。シノリクスは彼が王位を狙い、カンマを誘惑したと考えるが、カンマはシノリクスの先王殺し、彼女自身の復讐心、それを押しとどめようとしたソストラートの忠誠心、そして彼の無実を明らかにする。そこへエジオーヌを擁護する民衆の反乱が知らされ、シノリクスが出ていく。彼の死。実は婚礼の盃に毒を注いだことをカンマは告白し、彼女自身にも毒が既にまわり、復讐の成就を喜び、彼女のソストラートへの愛と名誉が守られたことに満足して息絶える。ソストラートの錯乱。 (千石)

Thomas Cornille : *Ariane*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1672年2月26日、オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1672年

主な出典 プルタルコス『対比列伝』



前年12月マレー座で上演されたde Visé: *Le Mariage de Bachus et d'Ariane* から、この作品を思い付いたといわれる。フェードルが姉アリアーヌとテゼーの駆け落ちに同行、及びナクス Naxe 島からテゼーと逃げる重要な筋は、Antonins-Trito, Garnier, Hardy: *Ariane ravie*, Viau: *Pasiphaé*(1628年出版) から採った。主題、スタイル、筋の単純さ、ラシーヌ的な情念による筋展開が賞賛を浴び大成功を取めた。女優ラ・シャンメレ La Champmesle の演技に負うところも多い。1675年にはディジョンのアンギャン公一座のレパトリーに、また17世紀に書かれた作品のうちラシーヌの5作、コルネイユの4作、彼の *Le Comte d'Essex* を除き、パリで18世紀に最も多く上演された作品である。(1680-1793年、コメディ・フランセーズ、258回)

〔第一幕〕 ナクス島、ウナリユス王の宮殿。ウナリユス王はテゼーとアリアーヌ、その妹フェードルを迎え入れている。クレタ島の怪物退治の英雄テゼーはそれを助けたアリアーヌと恋に落ち、彼女の父ミノス王の反対を逃れ駆け落ちし、嵐にあいこの島に漂着、ここで婚礼を挙げることにしている。しかし既に3ヶ月延期されたままである。婚礼の証人として呼んだ親友ピリトウスの到着を待つというのがその理由である。ウナリユス王はアリアーヌに恋をして、この延期をテゼーの心変わりではないかと秘そかな期待を抱いている。いよいよピリトウスが到着。しかしテゼーは実はフェードルと相思相愛、アリアーヌにそれを悟られぬように彼女を恋慕するウナリユス王と結婚するように説得してもらおう為に呼んだのだと彼に打ち明ける。

〔第二幕〕 婚礼を目前にしてアリアーヌの愛の高まりは一層強く、常日頃フェードルが恋に無関心なことがもどかしい。ウナリユス王は彼女に希望の無い愛の告白をする。アリアーヌは王への感謝と敬意、そしてテゼーへの愛の証明のために妹フェードルを自分たちの婚礼の日に王と結婚させることをテゼーに提案する。しかし彼は躊躇し日取りも決めず、ピリトウスに後を頼みその場を出ていってしまう。ピリトウスは理由は言わずに、テゼーが結婚破棄を望み、彼女がウナリユス王と結婚しこの国の女王になるほうがふさわしいと考えていると伝えるが、アリアーヌはこの不履行の理由をライバルの存在と考え、悲痛の余りフェードルにその苦しさを訴え、彼女に代わりテゼーの心を取り戻すよう頼む。

〔第三幕〕 意識せずにテゼーを愛し、それを彼に語り彼の恋心を大胆にしてしまったとフェードルは悔やむが彼女自身もはやテゼーに抗うことができない。アリアーヌの頼みをピリトウスに依頼する。彼は恋敵の存在を伝える以外に方法がないと決意、アリアーヌに裏切ったテゼーを追うより王の愛と王冠を受けることを勧める。アリアーヌはテゼーに向かい彼の愛のために彼女がしたこと、捨て去ったもの、彼こそ彼女の世界そのものであり彼に忠実でありつづけたことを訴えるが、テゼーの心は硬く、感謝と敬愛を示すばかり。この島で出会った恋の事実を否定しない。彼の目の輝きに恋敵の存在は疑いようもなく、誰であるか突きとめることだけにアリアーヌの狂気は向かう。

〔第四幕〕 ウナリユス王はこの一変した事態に驚かないがアリアーヌの身を案じ、フェードルの願いも聞き入れてアリアーヌを守ることを誓う。アリアーヌは彼の再度の求愛に激しい恋を鎮めるにはそれに匹敵する苦しみが必要、テゼーが恋敵と結婚したのをみた後王がまだ愛してくれるなら彼の

愛を受けるだろうと約束する。非現実と思った自分の言葉にヒントを得て、それをテゼーに知らせにやる。アリアーヌの変化を不信に思うフェードルにアリアーヌはこれはテゼーを畏にかけける口実、こうして恋敵を知り自分も死ぬ。否、恋敵を刺し復讐をするためと打ち明け、この秘密を守り、協力することを求める。結婚を快く認めたアリアーヌにテゼーは安心しているがフェードルに真実を知らされ、危険を避けるためこの島を去ることをフェードルに提案、彼女は姉の二の舞を懸念しつつ恋の絆に賭ける。

〔第五幕〕 翌朝。恋敵の詮索に苦しめられ眠れぬ夜を過ごしたアリアーヌに漸くフェードルの存在が浮かび、急いで彼女を呼びにやる。ピリトウスがテゼーの突然の出発を知らせにくる。フェードル不在の報告。胸騒ぎ。王の使者が王宛のテゼーの手紙を持ってくる。そこにはフェードルと共に無断で出発する詫びが記されていた。アリアーヌはテゼーの裏切りに加え妹が恋敵であったこと、その妹に自分の愛と苦しみを打ち明けていた屈辱、彼らの相愛の姿の相像に錯乱状態に陥り、王の慰めの言葉も耳に入らない。剣に手を掛けるが取り上げられ、絶望のうちに気を失う。 (千石)

Thomas Corneille : *La Mort d'Achille*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1673年12月29日、ゲネゴー座。

出版 1674年

主な出典 『イリアド』(最終巻) Dictys Cretensis: *Ephemeris Belli Trojani* (第3, 4巻),  
Benserade: *Mort d'Achille*

この劇団に彼が与えた最初の悲劇作品。ラシーヌが次の作品を書いている間、劇団はそれと同じ題材のものがほしかった。『アリアーヌ』の大成功でラシーヌに対抗出来る作家と考えられ、彼も再びギリシャに題材を求めさせた。結果はパリで9回、サンジェルマンで1回、上演されただけである。ラシーヌの『バジャゼ』、『ミトリダット』の影響がみられるといわれる。

〔第一幕〕 ギリシャ軍陣営、トロヤ戦争はエクトールの死により終わろうとしている。アシル(アキレウス)の囚われの王女ブリゼイスはアシルに愛され、彼に力を持っている。アシルはエクトールの遺骸引渡を拒んでいたが、彼女に引き合わされたエクトールの妹ポリクセーヌを見るやいなやその願いを聞き入れ譲歩、休戦を提案する。アシルの息子ピュリスはポリクセーヌと相思相愛、彼女との結婚のために、平和を切望、ブリゼイスに助力をもとめる。ポリクセーヌは兄の死の模様をおもうとアシルを憎み、ピュリスとの結婚に死の匂いを感じ躊躇する。

〔第二幕〕 アシルはポリクセーヌが涙を流し懇願する様子に恋したのであった。自分の武勲は彼女を恋させるに十分であり今は唯彼女との結婚だけを考え、ブリゼイスには国を返しやればよいと心づもりをしている。ブリゼイスはギリシャとトロヤ両国の和平のためにポリクセーヌとピュリスの

結婚を提案し、アシルは和平交渉を受諾する。しかし息子が恋敵であることを知り、その運命の苛酷を呪うが息子の服従を父として求めるのが当然と考える。一方和平交渉と自分の結婚が同義だと思いついておられるピュリスは父にポリクセーヌと愛し合っていることを打ち明ける。アシルは強い衝撃を受け信義より情熱に従うことに決めポリクセーヌの父トロヤ王プリアムに結婚の承諾を求めに行く。

〔第三幕〕 アシルとプリアム（プリモス）の交渉の開始。しかし和平の条件はピュリスの期待とは異なりポリクセーヌは他の人の手に委ねられると知らされ、彼は復讐に燃えるがアシルに禁じられる。アシルの約束を信じるブリゼイスはこの結果は他の不当な理由によるものと考え、この平和を壊そうとするがピュリスに引き止められる。ポリクセーヌはアシルが結婚相手であることを告げる。彼女は自分の不幸な運命に従おうとするがもう一度アシルを説得することを勧められる。裏切られたブリゼイスはこの結婚を壊すためにユリス（ユリシーズ）らに援けをもとめに行く。

〔第四幕〕 ギリシャとトロアの平静な反応とポリクセーヌを勝ち得たことに満足する一方、アシルは彼女の心だけが不安の種である。ポリクセーヌはアシルの名誉に訴え、強引な結婚を諫め、ブリゼイスのためにピュリスを諦めると約束をしてアシルの翻心を試みるが、彼は再度の戦火をほのめかし応じない。ブリゼイスはアルゴスの女王として気位の高さとアシルへの未練で彼を傷つけながらアシルに懇願をするが彼は冷たく拒む。希望を失ってブリゼイスは彼の死を願い、結婚を壊すためプリアムのもとにゆく。

〔第五幕〕 プリアムは娘の運命を悲しむが、平和のためにブリゼイスの願いを退け、神殿は婚礼の準備が整えられている。ポリクセーヌは死を覚悟している。ユリスの援けも無く、ピュリスはこれを最後と恋人に会いにくる。二人の別れ。ブリゼイスは平和と引き換えられた恋人たちの運命を嘆く。婚礼の神殿でアシルがパリに襲われたという報告。アシルの死を願いながらも彼を愛するブリゼイスはその死を恐れる。アシルの死と最後の言葉；自分の罪のためにこの卑劣なパリスの一撃で死ぬ。ブリゼイスの復讐はこうして遂げられた。しかし彼女を去る時どんなに辛かったことか．．．今こそ絶望するブリゼイスはアシルの復讐を誓い、パリスの血に自らの死を求める決意をする。

（千石）

Thomas Corneille: *Le Comte d'Essex*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1678年1月7日、オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1678年

出典 英国史

競合作品 Boyer: *Le Comte d'Essex* (1678)

コルネイユ、ラシーヌの指導的役割の終了、主題の行き詰まり、執筆の停止によりこの時期、他に

は見られない現代史を扱った作品が幾つか現れた。これはその一つで、唯一の成功作品でもある。この作品の歴史的記述部分は、Camden から採ったと作者自身が序文で述べている。先行作品である La Calprenède: *Le Comte d'Essex* (1639) にも、主題、その他多くの点で類似が見られ、参考にしたと思われる。

〔第一幕〕 宮殿。国家維持に貢献し、女王エリザベスの愛を受けるエセックス伯は己の力に自信を持っている。友人サルスバリー伯は伯爵を陥しめようとする敵の動きを察知し彼らに口実を与える軽率な行動を戒める。実は4-5日前伯爵は女王の宮殿を軍隊で包囲したのだ。それは意外にも伯爵が相思相愛の秘密の恋人アンリエットの結婚を阻止するのが目的であったという。彼女は伯爵が自分のために女王に冷ややかになり、女王の疑心をかき立て寵愛と命を失うことを恐れイルトン公と結婚したのだ。彼女は伯爵に自重を求める。しかし伯爵は彼女を失い生きる望みを失っている。彼の敵、奸臣セシルが伯爵の釈明を求める女王の命令を伝える。

〔第二幕〕 宮殿。愛されていないと感じるエリザベスは誇りを傷つけられ、疑い深く心は動揺しやすい。セシルらの進言により数日前の伯爵の行動をアイルランドと組んだ陰謀と疑っているが、公爵夫人のとりなしで一旦は疑いを和らげるが、セシルが持ってきた証拠の手紙に、伯爵の是非を問うため、議会を召集する命令を下す。女王に会いに来た伯爵は、敬意と謝意を示すが許しを乞うことを求められ断る。それによって全てを宥す積りである女王の意図を見抜いた公爵夫人は伯爵にそれを勧めるが、愛の罪以外は潔白の身と不本意な懇願は彼の誇りが許さない。公爵夫人は女王の心を和らげるために、女王の下へ再び赴く。伯爵の逮捕。

〔第三幕〕 宮殿。セシルは伯爵の有罪と陰謀の事実を伝える。伯爵の死刑決定に女王の心は動揺。名誉心はこれを認めようとするが、愛の感情に負け、伯爵に赦しを求めるよう使いを走らせる。サルスバリー伯は伯爵の有罪はセシルらの捏造、と女王に再考を促し、女王はこれを受け入れる。女王は今や伯爵の誇りが彼女の宥しを入れず、それが彼の死を導くことを恐れる。彼の死を準備したのはもとはといえば彼の裏切り、愛人サフロの存在であると公爵夫人に語る。公爵夫人は伯爵が愛するのはサフロではなく、自分である、彼の愛を受けぬために自分は公爵と結婚した、従って彼は無実であると告白する。女王は一時嫉妬と復讐の念に駆られるが、彼の死が女王を戦慄させ、この事実を赦す。但し女王の名誉のため、彼に慈悲を求めるように公爵夫人を彼の下に遣わす。

〔第四幕〕 牢獄。伯爵は誇り高く女王の使いを帰す。一番愛する者を失った今生きるのは寧ろ忌まわしい、とサルスバリー伯と公爵夫人の懇願も退け、衛兵と共に死刑台に向かう。

〔第五幕〕 宮殿。宥しを乞わない伯爵の様子に又もや女王の誇りが頭をもたげる。そこに公爵夫人が現れ伯爵が処刑に向かったと告げる。女王は伯爵救命のため使いを遣わす。名誉を捨てたことを嘆げく一方処刑停止命令が間に合わないのではないかと恐れる。女王の署名なしに執行を急いだセシルを強く咎め、退ける。伯爵の潔白を見抜けなかった盲目の愛と激しい嫉妬こそが伯爵を死に至らしめたと後悔する。伯爵の死の知らせ。女王は嘆き、自らの死の近いことを予感し、公爵夫人には伯爵の死を悼む許しを与える。サルスバリー伯による伯爵の死の模様と遺言；女王の慈悲を受けなかったのは

驕った心からではなく生に捲み、倦怠の重さに耐えかねたため。女王は伯爵の功績を讃え彼の名譽を回復する。 (千石)

Jean Batiste l'Hermite de Vauzelle : *La chute de Phaëton*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1637-38年, 劇団は不明

出版 1639年

主な出典 オウィディウス『転身物語』巻1, 2, *Trebuchement de Phaëton* (作者不明, 1624)

ランカスターは、「この悲劇は、規則、礼節にはずれ、性格の描写も無い。喜劇性と悲壮味とスペクタクルな場面の奇妙な混合である」と評している。事実、初演は1637-8年で「ル・シッド論争」以後であるにも関わらず、三単一の規則に照らしてみると、場所は、地上（エチオピアからガンジス川まで）、天上、冥界、海に移動。時間は、数日または数十日。liaisons des scènesは、11ヶ所で切れ、全く規則から外れている。一方、オリンポスの神々が次々と登場し、ファエトンの墜落が舞台上で演じられる等、スペクタクル性に富んでいる。Claveretの*Le ravissement de Proserpine* (1639)、Chapotonの*La Descente d'Orphee aux Enfers* (1639)とともに、機械仕掛けの芝居の先駆的作品と評価される。パルフェは、キノーのオペラ*Phaëton*にヒントを与えたのではないかと述べている。また、第五幕第二場、第三場で、モームがマルスをからかう台詞は、コルネイユの『うそつき男』に影響を与えている。

【第一幕】 ファエトン（パエトーン）は、自分が太陽神アポロンの息子であると出生を誇るが、友人は信じない。ファエトンは怒り、母に真相を質そうと決心する。母は、ファエトンが火の車に乗り、都市を焼き尽す夢を見て、不安に駆られる。そこへファエトンが現れ、本当の父親が知りたいと、母に迫る。母は、怒り、アポロンの許に行って尋ねよと命じる。

【第二幕】 数日が経過。ファエトンは、幾山川を越えて、女神ディアヌの森に来る。ディアヌは、ファエトンをアポロンの息子と認め、通過を許可する。次に、メルキュールの住居に至り、メルキュールに敬意を表して通過。次に通りかかったヴェニユスの住居では、ヴェニユスからアポロンと母の出会いと恋の物語を聞く。一方アポロンは、太陽として天上を一周する時間を待っている。そこへ、ファエトンが到着。アポロンは喜んで、歓迎の意味で自分の馬車を彼にみせる。

【第三幕】 アポロンの馬車の前。ファエトンは馬車に乗りたい気持ちを抑え切れない。ファエトンの浮かぬ顔を見て、アポロンは願い事を何でもかなえてやると、ファエトンに約束する。ファエトンは馬車を御する許しを求める。アポロンは驚いて、無謀な願い事を止めるが、ファエトンは聞かない。アポロンは、誓いを立てた以上は、息子の願いをかなえてやらざるを得ない。馬車の出発の時間が来て、ファエトンは馬車に乗る。

〔第四幕〕 馬車に乗ったファエトンは、思うように乗りこなせないで、不安を覚える。さそり（座）と射手（座）を見て、驚いたファエトンは手綱を取り落とす。馬車は暴走する。シベールが地の底から現れ、世界中が燃え盛り、世界が破滅の危機に瀕していると告げる。波の中から海神ネプチューンが現れ、海が熱くなり、世界中の川が干上がったと告げる。冥界の神プルートンは、異常な暑さで冥界が大騒ぎになっていると告げる。神々は、ジュピテルの許に集まり、このままでは世界が破滅する、ファエトンを罰するようと口々に迫る。ジュピテルは、ファエトンに雷を落とし、墜落させる。

〔第五幕〕 ジュピテルは、メルキュールに命じて、アポロンを連れて来させる。ジュピテルは、アポロンを慰め、ファエトンを天に生まれ変わらせようと提案する。アポロンは納得する。ファエトンの母親は、彼の墓の前でその死を嘆いている。二人の娘は、母を慰める言葉も無く、ポプラの木に変身する。そこへメルキュールが現れ、ファエトンは天でアポロンとともにいる、娘達は永遠に生き続け、彼を讃えることになるのだと、母を慰める。 (橋本)

Boyer : *Ulysse dans l'île de Circé*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1648年12月、マレー座

出版 1649年

主な出典 『オデュッセイア』第10-12章

1647年春、マレー座の主要な俳優たちは、王命によってオテル・ド・ブルゴーニュ座に移籍した。劇団解体の危機に瀕したマレー座は、機械仕掛けの芝居に活路を求めた。始めは旧作数編（例えば、Chapoton の *La Descente d'Orphée aux enfers*）の再演を行った。新作としては、この作品が初めて取り上げられ、成功した。本格的な機械仕掛けの芝居としては、最初の作品であり、シェレルも「このジャンルの創始者は恐らくボワイエである」と認めている。ビュッフカン Buffequin が装置を担当した。ランカスターによれば、「この芝居の目的は、シルセとシレーヌの音楽に依って効果を高められた、変化に富む、豪華な機械仕掛けの為に書かれた」。デイエルコウフ＝オルスボウエルによれば、*Ulysse dans l'île de Circé* は本格的な大スペクタクルの芝居であり、マレー座は機械仕掛けの劇場になった。しかしその一方、三単一の規則に関しては、時間は3日であり、場所はシルセの島、海そして冥界である。ランカスターによれば筋も統一されていないし、*bienséance* も遵守されていない。

〔第一幕〕 シルセ（キルケ）の島の浜辺。ユリス（オデュッセウス）の妻ペネロップ（ペネロペ）の使いペリメッドは、遭難し、この島に辿り着く。風の神エオール（アイアロス）は、この島にユリスがいると告げる。ユリスは、ペリメッドから妻の手紙を受け取り、帰国を決意する。シルセの妹ファエテューズに密かに恋する仲間のウーリロシュは、帰国に反対する。シルセに誘われて、ユリスは

シレーヌの歌を聞きに行く。ウーリロッシュは、ユリスの帰国を妨げようと、シルセのもう一人の妹リュージュに密告する。ユリス一行が、船に乗ってシレーヌの歌を楽しんでいる間、ウーリロッシュは、ペリメッドを仲間に引き入れ、ファエテューズとこの島を手に入れようとする本心を明かす。

〔第二幕〕 庭園。ユリスの友人エルペノールとファエテューズの恋の語らい。そこへ現われたファエテューズは、この島の王位をファエテューズに与えようと提案するが、彼女は相手にしない。(洞窟)シルセは、ユリスを引き止めるため、ペネロップが不貞を働いている夢を彼に見させてくれと、眠りの神に頼む。

〔第三幕〕 シルセの宮殿。ウーリロッシュとエルペノールの不和を案じたシルセは、ウーリロッシュがファエテューズに見えるように、エルペノールの目に魔法をかける。ユリスは、不貞を働いたペネロップが息子に殺された夢を見た。ユリスは、シルセの魔力で冥界に行って真偽を確かめたいと頼む。ユリスが冥界に去った後、ウーリロッシュは、エルペノールにシルセの魔法が掛けられていることを知り、二人の仲を裂くためファエテューズのふりをして、彼に愛想尽かしをする。

〔第四幕〕 冥界。岩を永遠に押し上げているシジフ(シジフォス)は、ペネロップが冥界にいると偽る。ティレゾイ(ティレジアス)が、シジフを追い払い、ペネロップは生きてると、ユリスは告げる。(宮殿)シルセは、エルペノールの魔法を解き、エルペノールとウーリロッシュに和解を命じる。シルセは、エルペノールとファエテューズ、ウーリロッシュとリュージュの結婚を認める。そこへユリス帰還の報が入る。ウーリロッシュは、自分の計画が水の泡になったことをくやしがる。

〔第五幕〕 宮殿。シルセは、自分を裏切って帰国しようとするユリスを塔に幽閉し、復讐しようとする。ユリスは、ペネロップを裏切れば名誉を失う、シジフの血筋を引く自分との結び付きはアポロンの血筋を引くシルセの名誉を汚すことだと、シルセに説く。シルセは、納得する。そこへ、ウーリロッシュが、ファエテューズを誘拐して船で逃亡したという知らせが入る。(船の中)ウーリロッシュはファエテューズに迫り、彼女は誘拐したウーリロッシュを呪う。一艘の船が追い掛けてくるといふ報が入り、ウーリロッシュを反撃の準備をさせる。ジュピテルとアポロンが空中に現れる。ジュピテルは、アポロンの願を聞き届け、ウーリロッシュに天罰を下すと宣言する。シルセが、空飛ぶ二輪馬車に乗って追い掛けてくる。ジュピテルが鷹に乗って現れ、ウーリロッシュの船に雷を落とす。ファエテューズは海豚に救われ、その背に乗って現れる。ファエテューズは、シルセの馬車に乗り替え、島に帰る。

(橋本)

Pierre Corneille : *Andromède*

ジャンル 五幕韻文悲劇、プロローグ付

初演 1650年1月プチ・ブルボンの劇場にて、オテル・ド・ブルゴーニュ座員

出版 1650年

主な出典 オウィディウス『転身物語』巻4,5

母后マリー・ド・メディシスの要請により1645年から47年にかけてイタリア・オペラがパリに来演、1645年『偽の気違い女』、1646年『エジスト』、1647年『オルフェオ』を上演した。これらの上演はいずれもイタリア語だったので、宰相マザランは、1647年に翌年の謝肉祭に向けてコルネイユにフランス語の台本を依頼した。しかし、国王ルイ十四世の病気、ヴァンサン・ド・ポールによる母后への上演中止の勧めもあって、上演は見送られた。その後フロンドの乱が起こり、結局初演は1650年プチ・ブルボンの劇場でなされた。音楽はダヌシー、装置はトレルリが担当した。この芝居は、神々の飛行を舞台上で見せる大スペクタクル劇で、「機械仕掛けの芝居」の初期の作品の一つである。コルネイユの作品の中では、「間奏曲」(アダン)と形容されるように評価は低いが、機械仕掛けの芝居の傑作の一つであり、以後の機械仕掛けの芝居のモデルとなった。三単一の規則に関しては、時間は一日である。場所は各幕毎に変わるが、一応エチオピアのセフェの王国の首都とされている。liaisons des scènes は、二回切れている。初演後、1653年にモリエール一座が南仏巡業中リヨンで上演、1654年には一連の機械仕掛けの芝居を上演していたマレー座が取り上げた。その後も何度か再演されたが、1682年にはコメディ・フランセーズが上演し大成功を収めた。(本誌「『機械仕掛けの芝居』」参照)

〔プロローグ〕 太陽神、馬車に乗って天上に登場。悲劇を司る女神メルポメヌスは、太陽神に運行を止めこのスペクタクルを照らせと呼び掛ける。太陽神には運行を止めるわけにはいかないが、ルイ14世の未来を祝福する。メルポメヌスは太陽神の馬車に乗り込み、二人は、ルイ14世を讃えながら飛び去る。

〔第一幕〕 セフェ王の都の広場。王妃カシオップは、自分が娘アンドロメード(アンドロメダ)の美しさを誇ったために、海の神の怒りを買ったと、旅人のペルセ(ペルセウス)に嘆く。父親である国王セフェは、神の怒りを静めるため、アンドロメードを犠牲に供する覚悟である。まぶしい光が射し、天から女神ヴェニユスが下りてくる。女神は、今夜アンドロメードは彼女に相応しい夫を得ると告げる。

〔第二幕〕 庭園。アンドロメードの婚約者フィネは、彼女にヴェニユスのお告げを伝える。そこはセフェが登場、アンドロメードを海の神の犠牲に供することに決定したと告げる。フィネが、不当な決定に抗議していると、突然雷鳴と稲妻、風の神が天上に現れ、アンドロメードを奪って飛び去る。

〔第三幕〕 海岸。風の神が、アンドロメードを運んで来て、断崖絶壁に彼女を繋ぎ止める。アンドロメードを追い掛けて来たカシオップは、岸からアンドロメードを見て、神を呪う。怪物が海から現れる。ペルセが、ペガサスに乗って天から下りて来て、怪物と戦う。ペルセは、怪物を倒す。カシオップは喜び、ペルセをアンドロメードの夫と認める。ペルセの命令で、風の神たちはアンドロメードを岩から外し、王宮に運び去る。一同が立ち去った後、海の精たちが波間に現れ、復讐が失敗したことをくやしがる。海の神ネプチューンが法螺貝の馬車に乗って登場、怪物が殺されたことを怒り、大神ジュピテルに訴え出ようと言う。

〔第四幕〕 王宮の前庭。フィネは、アンドロメードとペルセの結婚の話聞いて怒る。しかし、



アンドロメードは、「怪物から私を救って下さったのはペルセです」と、フィネを相手にしない。フィネは力づくでアンドロメードを奪い返そうと決意、女神ジュノンに助力を求める。ジュノンが孔雀の牽く車に乗って天に登場。女神は、フィネを励ます。

〔第五幕〕 神殿の前。父王セフェは、二人の結婚をジュピテルが祝福したと告げる。そこへ、フェネとその仲間がペルセを襲撃したが、メデューズの首を見て石に変わった、フィネだけが逃亡したとの報告が入る。ペルセとアンドロメード、彼女の両親を先頭に、一同神殿で結婚の儀式を取り行おうとする。すると神殿の扉がひとりで閉まる。一同がいぶかしがっていると、ジュピテル、ジュノン、ネプチューンが天に現れる。ジュピテルは、ジュノンとネプチューンは怒りを解いた、この結婚式は地上では相応しくないと告げる。ペルセ、アンドロメード、セフェ、カシオップは馬車に乗って天上に登る。合唱が神々を讃える。 (橋本)

Thomas Corneille : *Circé*

ジャンル 五幕韻文悲劇プロローグ付

初演 1675年3月17日、ゲネゴー座

出版 1675年

主な出典 オウィディウス『転身物語』巻14。

音楽、シャルパンティエ。装置、スールディアック侯爵。「機械仕掛けの芝居」で、飛行、音楽、歌、舞踊、豪華な装置、動物の登場などスペクタクルの要素が豊富に盛り込まれている。時の一致の規則は守られているが、場の一致、筋の一致、liaisons des scènes は無視されている。モリエールの死後1673年7月にモリエール一座とマレー座が合併し、ゲネゴー座が成立、しかしモリエールの旧作のみではレパートリーは成り立たず、この劇場の装置を活用しようと考え、「機械仕掛けの芝居」の上演を思い付いた。上演の準備は、1674年4月に始まり、10月上演の予定だったが、出費を恐れる一部の俳優が上演に反対、これに一座の主導権を握ろうとするスールディアック侯爵の動きが絡んで訴訟沙汰になった。結局上演は大成功を収め、上演回数で年間で74回、ほぼ1年間続演し、十分に収益が上がることを証明した。初演の成功にも関わらず、リュリの妨害で上演中止。上演に費用がかかるため、再演は1705年まで行われなかった。

〔プロローグ〕 国王ルイのための神殿の前。軍神マルスが馬車に乗って天から舞下りる。評判を司どる神も雲に乗って登場。二人は、人間の王のために神殿が建てられたことを怒り、壊そうとする。愛の神と名声の神もこれに加わる。栄光の神がルイを弁護し、一同納得する。悦楽の神と芸術の神が呼ばれ、一同は歌と踊りを鑑賞。劇を司どる神と音楽の神の対話で、ルイが誉め讃えられる。プロローグは、以後の筋書きとは直接の関わりは無い。

〔第一幕〕 平原。水の神グロックス（テラース国の王子に変装）は、人間の女性シッラに恋して

いる。シッラは、テーベの王子メリセルトと相思相愛だが、メリセルトは行方不明になっている。グロックスは、水の精ガラテにシッラへの恋の仲立ちを頼むが、失敗。シッラは、グロックスの言葉に耳もかさず、メリセルトの行方を捜して貰うため、魔女シルセ（キルケ）の宮殿へ向かう。グロックスも彼女の後を追う。一同の去った後、シルセの侍女三人が魔術に使う薬草を摘みにやってくる。そこへ三人のサトゥルヌスが現れる。彼らは、それぞれが三人の侍女の中、誰を自分のものにするか、歌の上手さで決めることにする。歌を競っているところへ、さらに二人のサトゥルヌスが現れ、分け前を要求。そこへシルセが現れ、魔力で二人を舞台袖へ、三人をすのこへ舞上がらせる。グロックスは、シルセにシッラの心を自分に向けてくれと助力を求める。シルセは、彼を馬車に乗せ、自分の宮殿へと、天に昇る。

〔第二幕〕 シルセの庭園。シルセは、シッラの恋人メリセルトを恋の虜にして宮殿に住まわせている。しかし、シルセは今グロックスに恋し、メリセルトに見向きもしない。シルセは、魔力を駆使して（彫刻台を大きくしたり、何処からとも無く声を聞かせる）グロックスを魅惑しようとする。彼が自分の意に従わないとみるや、獣たちに彼を襲わせ、彫刻を動かす。しかし、神であるグロックスをその力を使って対抗する。

〔第三幕〕 シルセの宮殿。シルセが、シッラをメリセルトに会わせようとする。グロックスが現れ、シルセの面前でシッラに恋を告白する。怒ったシルセは、シッラとともに空中に消える。グロックスが女神ヴェニウスに祈ると、ヴェニウスが空から現れ、愛の神たちに行方を捜させる。

〔第四幕〕 森。シッラに捨てられたメリセルトは、悲嘆に暮れている。手渡されたシルセの指輪の魔力で、彼の心はシッラに移る。シルセとシッラは、追手を逃れてくる。牧神と森の精の歌と対話で二人が心を休めていると、ヴェニウスが行方を捜しているとの知らせが入る。シルセは、妖精たちを使ってシッラを天に隠そうとする。愛の神々が現れ、空中で妖精たちと戦闘、シッラを奪い去る。太陽神が天に現れ、神であるグロックスには歯が立たないと告げるが、シルセは耳を貸さず復讐を誓う。グロックスが遣って来てシッラを引き渡すように要求する。そこへ、シッラが宮殿に舞降りて、メリセルトとの再会を喜んでいるという報告が入る。シルセは偽って、グロックスへの助力を申し出る。

〔第五幕〕 糸杉の長い小道。メリセルトから引き離され、彼の身を案じるシッラは、グロックスの意に従おうと彼に会いに行く。シルセの魔力で、彼女に歯向ったメリセルトは木に変えられ、シッラは醜い姿にされたと報告が入る。グロックスは、シルセにシッラにかけた呪いを解くように頼むが、シルセは断る。そこへ、シッラは海に身を投げて死んだという知らせが入る。場面は海辺に変わる。海の神ネプチューンはグロックスを憐れみ、シッラを蘇らせることをジュピテルに頼む。ジュピテルは、グロックスが彼女に近付かないという条件で、願いを聞き入れシッラを蘇らせる。（橋本）

作品梗概集索引

(1573)	Garnier : <i>Hippolyte</i> .....	74
1629	Rotrou : <i>La Bague de l'Oubli</i> .....	83
1634	La Pinelière : <i>Hippolyte</i> .....	76
1636	Rotrou : <i>La Belle Alphrède</i> .....	85
1637	Rotrou : <i>Laure persécutée</i> .....	86
1639	Jean Batiste l'Hermitte de Vauzelle : <i>La chute de Phaéton</i> .....	94
1645	Gilbert : <i>Hypolite</i> .....	78
1648	Boyer : <i>Ulysse dans l'isle de Circé</i> .....	95
1650	Pierre Corneille : <i>Andromède</i> .....	96
1661	Thomas Corneille : <i>Camma</i> .....	88
1672	Thomas Corneille : <i>Ariane</i> .....	89
1673	Thomas Corneille : <i>La Mort d'Achille</i> .....	91
1674	Bidar : <i>Hippolyte</i> .....	79
1675	Thomas Corneille : <i>Circé</i> .....	98
1677	Pradon : <i>Phèdre et Hippolyte</i> .....	81
1678	Thomas Corneille : <i>Le Comte d'Essex</i> .....	92